一九六〇年代における井上靖の中国関係歴史小説の大衆性

―大衆雑誌との関係を視座に―

何　志勇

一九五五年、産業総合の生産指数がついに戦前の最高水準を突破、「もはや戦後ではない」という「経済白書」の宣言をもって、日本は経済的に、また社会的に、「戦後時代」を終了させた。その代わりに、日本は大衆社会に突入し、新たな展開を見せつつあり、一九六〇年における安保反対運動と高度経済成長政策により、都市化の進展と大衆意識の形成がもたらされた結果、大衆文学もマスコミと緊密な関係を保ちながら、ようやく大正十年代以来の第二の盛況を迎えることとなった。

一九六〇年代の大衆文学には、マスコミの影響による性格が色濃く現れていると考えられる。そもそも、日本の大衆文学は関東大震災の一、二年後にマスメディアの成熟を基盤として成り立ったので、その最初からマスコミ的性格を内包しているが、六十年代において、その性格はいっそう強く打ち出され、時代物が中心だった大衆文学の枠に、戦後になってから通俗小説も取り入れられ、さらに「中間小説」、昭和四〇年代に入ると「エンターテインメント」へと呼び名が移り変わっているが、そのことからもマスコミ的性格の存在が分かる。

小田切秀雄は次のように六〇年代における文学を述べている。

> 現代人の眼の一部、耳の一部とまで化したマスコミにおいてのこのような変質は、安定ムードを一層おしひろげることに大きな役割をはたしている。……このコマーシャリズムの規制によって文学は制作の内的営為においても大幅に変化してきており、純文学と大衆文学との区別がつけにくくなったとか「純文学」の滅亡とかいうような論が出るようになった。作者の内部の深い部分との関係を失った興味本位、技術本位の「現代的」よそおいだけの作品が増えているのである。(注1)

小田切の触れた安定ムードは経済成長及びそれによる都市化によってもたらされたものであると考えられ、この安定ムードの出現はそのまま大衆文学の盛況に繋がっていき、そしてまた、大衆文学に過去と未来という二方向に沿って発展させたのであると秋山駿は論じている(注2)。未来の方向において代表的なのは松本清張とそのミステリー小説であり、戦後の混乱期を生き抜き、大きな事件を毎日のように目の当たりにした大衆は、安定した環境を暮らすようになり、「事件なき日常」において、「日常のささやかな裂け目としての犯罪、日常の織り成す小さな事件としての犯罪が逆に、その日常の底でいったい何が生じているかを探針するところの、一つの測鉛のようなものと化す…われわれの生活を彩るものになってきた」。(注3)

それに対し、五〇年代に多くの歴史小説を創作し、六〇年に入っても依然として歴史小説を書き続けていた井上靖は、その過去に着目した小説家の一人であり、その歴史小説、特に中国関係歴史小説はマスコミの規制にのっとりながら、内容においては松本清張と同じように、どちらかというと小さな事件に眼が向いているように見受けられる。本稿は六

〇年代における井上靖の中国関係歴史小説を取り上げ、そのマスコミ的性格を代表とする大衆性を考察しようとするものである。

一　三回にわたる井上靖の中国旅行の初体験

一九五七年三月から八月にかけて、「天平の甍」は井上靖初めての中国に取材した長編歴史小説として『中央公論』に連載された。連載中の七月に、日中国交回復国民会議創立総会が催され、「戦後」が終わった日本は、安定した国際環境を図るために、中国との関係を改善しようとする動きを始めていたと考えてもよさそうである。「天平の甍」が翌年の二月に第八回芸術選奨文部大臣賞を受賞したのは、この関係改善の機運に乗ったのもあずかっているのではないかと考えられる。こんな時勢に乗って、一九五七年一〇月、井上靖は、日中文化交流協会主催による日本作家代表団の一員として、初めて中国を訪問した。

「天平の甍」を皮切りに、井上靖は、戦後の歴史小説史に跡を残した一連の中国関係の歴史小説を書き続けていた。一九五八年に中篇小説「楼蘭」、一九五九年に長編小説「敦煌」と「蒼き狼」を発表し、いずれも文学賞を受賞した。これらの創作と受賞歴によって、井上靖は、現代人の生活を取り扱う中間小説家から見事に変身し、中国物の代表的作家とされるに至った。一九六〇年一月に、日中文化交流協会で講演し、一九六三年四月に、当時京都大学人文科学研究所の東洋史教授岩村忍と歴史教養書としての『西域』（筑摩書房グリーンベルト・シリーズ一五・一九六三年四月）を共著するなど、幅広い活動と創作を見せている。一九五九年秋、アメリカ情報庁作成の「ＵＳＩＳ・ジャパン活動記録機密文書」に挙げられた日本の作家・文化人のオピニオンリーダー三六名の中に井上靖の名前も見られ、日本の世論を代表する文化人であると当時の井上靖を位置づけてもよかろう。「蒼き狼」を発表した翌年の一九六一年六月、中国対外文化協会の招きにより、「日本作家代表団」の一員として、井上靖は二度目に中国へ旅立った。

鑑真和上円寂一二〇〇周年にあたった一九六三年、中日両国は「鑑真和上円寂一千二百年記念集会」を催し、日本側から訪中日本文化界代表団が中国を訪問し、井上靖は「天平の甍」の作者として、初めて文化人として三度目に中国を訪問した。三回にわたる中国訪問は、井上靖を中国にゆかりの深い文化人に変身させ、その書いた中国関係の歴史小説は、出版社や雑誌ことに大衆雑誌の争奪の的になったと考えられよう。ちょうど、鑑真和上円寂の一二〇〇周年には、井上靖は、二月に「明妃曲」を『オール読物』に発表、同時に「楊貴妃」を『婦人公論』に連載し始め、四月に岩村忍と共著の「西域」も筑摩書房により刊行された。

後年、井上靖は『井上靖小説全集』自作解題において、次のように「楊貴妃伝」を述べている。

> 私は昭和三十二年、三十六年、三十八年と三回、中国対外文化協会の招きによって中国を訪れている。この三回の中国旅行がなかったら、「楊貴妃伝」の筆を執ることはできなかったと思う。殊に三十八年の旅行は、「楊貴妃伝」連載中のことであり、しかもその主要舞台である西安市を訪ね得たことは、小説「楊貴妃伝」の持った幸運であった。(注4)

井上靖においては、「楊貴妃伝」は中国旅行の中で実った作品だと考えており、それを作家の自己成長の中に位置づけるのはごく自然のこと

であるが、マスコミ化された六〇年代のジャーナリズム世界では、必ずしもそのようにのみ位置づけようとされたわけではないと見受けられる。『婦人公論』は昭和三八年新年特大号において「井上靖氏の歴史小説／初めて本誌に登場」の見出しで予告が出され、『オール読物』は昭和三八年二月の新春特大号において「今月の長篇小説」(注5) として「明妃曲」を発表した。二雑誌とも、新年号において、大げさに井上靖の中国関係歴史小説を取り上げるのは、井上靖がいかにその時代に尊重されているか、また、その時点のジャーナリズムの中国志向を物語っていると考えられる。

一九六四年、『群像』は八月号において、「文学読者の傾向」と題して、同誌で行ったアンケートを公開した。「最も読みたいと思う日本現存の小説家」に対する答えでは、井上靖は三島由紀夫に次いで二位を占めた。(注6) 中国旅行のおかげで、マスコミに大いに取り上げられた井上靖は、自己成長とともに、大衆文学時代の人気作家また有名な文化人としてタレント化され、六〇年代の大衆社会で輝かしい活躍ぶりを見せたと言えよう。

二　歴史の謎を解いたフィクション――『オール読物』の「明妃」と「永泰公主」

昭和五年、『オール読物』は『文藝春秋』の臨時増刊として誕生し、翌年四月から定期の月刊雑誌となる。発足当時から、既に大衆文芸雑誌の性格が備わり、昭和五五年講談社から刊行された『大衆文学大系　別巻』において大衆文芸の主要雑誌として『キング』『大衆文芸』などと名を連ねることでもそれが分かる。昭和一〇年設置された直木賞の受賞作に誌面を提供したり、平成六年に松本清張賞を設置したりで、大衆文芸の促進と新人作家の育成という姿勢はその後も続いた。

一九六二年、『オール読物』は六〇年代の大衆文学の要求に積極的に応えていくため、推理小説新人賞を設置し、ミステリー小説を掲げる路線を確立した。なぜ、六〇年代において、ミステリー小説は大衆文芸雑誌の注目を集めたのかについては、既に冒頭の部分で触れたので繰り返さないが、一九六三年の新春特別号に大げさに取り上げられた井上靖の「明妃曲」はこのミステリーブームとは何か関連があるのではないかと思われる。

「明妃曲」はその冒頭の部分がやや長すぎるような嫌いがあり、匈奴の由来、性格及びその魅力については、単于冒頓の逸話、宦者中行説の話に多くの筆を費やした。だが、それはすべて後にフィクション化された王昭君の話の下敷きになり、フィクションを真実であるように見せるための仕掛けであると考えられる。

冒頓が単于の位を奪うために、その父を射殺までするという逸話は、その後、王昭君の愛する単于呼韓邪の子が王昭君への誓言となった。

> もし父単于がなお何年も生きるなら、その時は父単于を殺す許りだ。彼は自分が汝を愛していることを知っている。にも拘わらず、いつまでも手離さないならば、何本かの矢は父の胸元を射ぬくだろう。余は太陽と月と汝のためには、いかなることでもするだろう。(注7)

宦者中行説の話はそれほど長くないが、いわゆる匈奴のファンになった宦者中行説をもって、後ほど王昭君はなぜ元帝を憎み、単于の子を愛

したのかを納得させる挿話として十分に役割を果たしたと言えよう。ちなみに、「明妃曲」が発表されてから四ヵ月後、小説「宦者中行説」は『文芸』に掲載され、「明妃曲」のフィクションの延長線上にある小説であると考えられる。

「明妃曲」と関連のある作品はほかに『西域』がある。一九六二年六月、井上靖は『西域』取材のため京都へ出向いたことから、「明妃曲」と『西域』は同時に構想されているものであると考えてもよさそうである。『西域』はグリーンベルトシリーズの一つとして、井上靖と歴史学者岩村忍との共著で制作された単行本である。歴史教養書的なもので、しかも歴史学者との共著であるから、フィクションをなるべく抑えたような調子で書かれた「西域の人物」の中には「王昭君」を扱った一節がある。『西域』の「王昭君」は主に史書『漢書』の「匈奴伝」と文芸作品で最も有名な「漢宮秋」を取り上げて紹介したが、作者なりのフィクションがほとんど見られない。ただし、小説家としての関心はその行間から読み取れないものでもない。

王昭君のみが、一人有名になったのは、彼女が美貌であり、元帝の後宮の中の一人であったためであろうか。中国の主権者の一族の娘の場合の方にむしろ同情が集まっていいと思われるが、話としては王昭君の場合の方が、王昭君、元帝、呼韓邪という人物構成を考えただけでも、劇的な要素を持つことになる。(注8)

この三角関係に対するフィクションへの衝動はその後「明妃曲」の中で王昭君、元帝、呼韓邪とその子の四人の関係となって現れてきたのであると考えられる。

史実の空白にフィクションをもって埋めるのは小説家の歴史に関与する方法であると言われ、井上靖もその例外ではなく、いつも歴史の狭間で自分なりの解釈を行っている。その空白の埋め方によって、小説家の性質が見られる。井上靖の場合は史実に隠された事実または知りえない心理、いわゆる歴史の謎をいつも自分に問いかけ、史実を損なわないフィクションで解釈付けようとしていると思われる。

「明妃曲」においては、井上靖は一つの謎を解こうと試みたようである。つまり、王昭君はなぜ番地へ赴く途中で、境界としての黒河に身を投じ自殺したのか。井上靖は小説の語り手としての田津岡竜英の話を借りて、自分の疑問を投げかけた。

大体〝漢宮秋〟の王昭君は矛盾していると思うんです。自分で国の犠牲になることを決意して匈奴に嫁いで行きながら、漢土と別れる情に耐えかねて投身するということは変じゃないですか。(注9)

『西域』にしろ「明妃曲」にしろ、王昭君の婚姻状況を述べた。

単于は王昭君を得て大いに歓喜した。こういう記述が載っている。なお単于王昭君を号して寧胡閼氏と為す。一男伊屠智牙師を生む。右日逐王と為す。呼韓邪死した後、その子単于の妻となり、二女を生む。長女を須卜居次、次女を当于居次と為す。こういった記述もある。恐らくこれが事実であろうと思われる。(注10)

今度は元帝の後宮の女性である王昭君が与えられた。そのために呼韓邪は非常に歓喜した。王昭君は呼韓邪との間に一男を生んだが、呼韓邪単于が死ぬと、その子の単于に嫁ぎ、更に二女を生んだ。これだけのことが『漢書』には記されている。(注11)

殆ど同じような書き方で、事実であろうと思われる史実を述べている

が、「これだけ」の史実では、中原の礼制文化の中で育った王昭君は前後して父子二人の妻になったことを十分説明できないようであるので、井上靖は、「明妃曲」においてフィクションをもって埋めようと努めた。

井上靖は、王昭君と呼韓邪の子との出会いを設け、この「凶悪残忍を以って知られている」匈奴の男に惚れた王昭君の心理を作った。しかし、王昭君は自分が嫁する人は惚れた青年ではなく、七〇歳もする青年の父であることを知った時、生きていく意味が無くなり、河に投身して死ぬことにした。死ねなかった王昭君は、老いた単于が死んだら、すぐ青年の妻になると、青年と約束を結んではじめて、将来への希望を抱きながら、無意味の生活を我慢できるようになった、という風に、井上靖は王昭君の自殺にまつわった謎を解いてみせたのである。

王昭君は国の平和のために、西域に行くことを決意したのでなく、元帝への憎みと匈奴の青年への愛情で西域という未知な土地へ赴くことにした。また、その自殺も、国への名残によるのではなく、愛情が消滅したので仕方なく取った極端的な行為にすぎない。井上靖はこんな仕掛けを通して、巾幗英雄という史実や従来の文芸作品に伝えられた王昭君のイメージを覆し、巾幗英雄の殉国という大きな事件を、一人の美しい女性が愛のために自殺するという日常的な小さな事件にうまく変えたのではないかと考えられる。「明妃曲」の王昭君は史実や伝説に規定された象徴的な人形ではなく、匈奴の青年の目を見て震え上がった王昭君はまさに生き生きとした一人の女性である。

このように、井上靖はフィクションをもち、文学的な真実を見せると同時に、六〇年代の大衆社会における日常の底を探るミステリー小説との一致性を見出すのに成功したと考えられよう。それ故、ミステリー小説を掲げた『オール読物』が井上靖の歴史小説に対してもやや大げさに取り上げたこともそれほど驚くには当たらないのであろう。

一九六四年一一月、『オール読物』に発表した中国に取材した歴史小説「永泰公主の頸飾り」も「明妃曲」と同じように、小さな事件を取り扱う傾向が見られ、テクストに即した分析を省かせていただくが、その代わりに、井上靖の書いた「中国の頼育芳訳『永泰公主的項链』序」における「永泰公主の頸飾り」の作品化の経緯をもって、その大衆的な傾向を説明することにする。

一九六三年の秋に何日か西安で過ごしたが、その折一日をさいて乾陵を訪ねた。そしてその帰途、乾陵の丘の裾にある永泰公主の墓を詣でた。墓は発掘して何程も経っていず、一般には公開していないらしかったが、特別に内部に案内して貰った。

永泰公主は祖母則天武后を批判したばかりに、十七歳の若さで、夫の武延基と共に死を賜った不幸な公主である。

長い地下の参道に導かれて、墓室に向う。参道はすばらしい壁画で飾られてあったそうであるが、それらは既に陝西博物館に移され、いまは模写したものに替わっていた。

墓室の前の部屋に入り、そこに置かれてある墓誌の前に立つ。

――永泰公主、名は李仙蕙、唐中宗の第七皇女。

――久視元年郡主に封ぜられ、魏王武延基に嫁し、十七歳にして崩ず。

――初め長安の郊外に葬られるも、神竜元年則天武后薨じ、中宗復位するや、乾陵に陪陵さる。

こうしたことが記されてある。杖死のことに一切触れていないの

も、乾陵に陪陵されたのも、父中宗の、不幸であったわが娘への愛情から出たことであったろうと思われた。

この墓も発掘してみて、初めて盗掘されていることが判ったという。金器、銀器などたくさんの品は失われていたが、併し、なお千数百点のものが残されており、唐三彩、壁画、石の彫刻など、いずれも唐代文物を代表する貴重なものばかりであった。

盗掘の跡は、私の眼にも、はっきりと、それと見ることができた。墓室の入口になっている石の扉の上部は壊されており、石棺にも槌様のもので叩かれた傷跡が、はっきりと残っている。そしてまた墓室の壁には、盗掘者のものと思われる大きな手套の跡も遺っている。

案内してくれた係員の説明によると、盗掘者は真上から穴を掘り下げて来て、あやまたず地下の参道に突当たっており、その勘のよさには驚くほかはないという。

それにしても、地中の真暗い部屋の中で、頑丈な石の扉を壊す作業に従事している盗掘者たちを想像すると、凄まじいの一語に尽きる思いであった。

なお、盗掘者は何人かの一団であったらしく、発掘してみると、侵入路の真下には、仲間の一人と覚しき人間の脛骨と、槌とが転がっており、その傍に宝石が散らばっていたということであった。

この中国の旅行を終え、帰国してから、永年に亘っての懸案である永泰公主のことを、小説の形で書こうと思って、その下調べに入ったが、いつも永泰公主の墓に入った盗賊の一団のことが思い出されて来て、それが妙に気になった。何人ぐらいの一団であり、いかなる連中であったか。しかも、その一団の中の一人は、墓の中に閉じ込められて、その内部に死体をさらすに到っているのである。

そのうちに、ごく自然にでき上がったのが、『永泰公主の頸飾り』という短篇小説である。永泰公主を主人公にした小説ではなく、永泰公主の墓の中に入った盗賊の一団を取り扱った短篇である。(注12)

（傍線は筆者が付けたものである。）

王朝権力の犠牲者である永泰公主の死という大きな歴史的背景を持ちながら、その中の一団の盗賊が行った日常的性格をもった謎めいた盗掘事件を取り扱うことによって、井上靖は自分の歴史小説を、ミステリー小説を代表とする六〇年代の大衆文学の枠に嵌めていくのである。

三　女性の生き方を応援する――『婦人公論』と「楊貴妃伝」

『婦人公論』は一九一六年に中央公論新社により発行された女性誌である。発足以来、女性の解放と自我の確立を求める時代の声をコンセプトとし、戦前において『主婦の友』『婦人画報』『婦人倶楽部』と並び、「四大婦人雑誌」と呼ばれていた。

井上靖は『婦人公論』に長編歴史小説「楊貴妃伝」を連載する前に、既に多くの小説やエッセイをそれに発表した。

昭和二六年（一九五一）　秘密（小説）
昭和二八年（一九五三）　野間宏
昭和二八年（一九五三）　あにいもうと
昭和二九年（一九五四）　愛撫

昭和三一年（一九五六）　カラコルム
昭和三三年（一九五八）　女であるために
昭和三四年（一九五九）　河口（連載小説、三五年五月まで一七回）
昭和三四年（一九五九）　女のひとの美しさ
昭和三五年（一九六〇）　養之如春（一週一言）
昭和三六年（一九六一）　ヨーロッパの旅から（連載、三七年二月まで一〇回）
昭和三七年（一九六二）　娘の結婚に思う「親から巣立つ娘へ」
昭和三七年（一九六二）　第一回女流文学賞選評：佳作「さくらの花」
昭和三八年（一九六三）　「楊貴妃伝」作者のことば
昭和三八年（一九六三）　楊貴妃伝（連載小説、四〇年五月まで二八回）

一九五九年の「河口」連載までに、井上靖は主に女性向けのエッセイ、随筆を発表したが、六〇年代に入ると、ヨーロッパや中国の旅行を生かし、早くも連載物を『婦人公論』に発表するようになった。一九六三年一月の『婦人公論』新年特大号に「井上靖の歴史小説／初めて本誌に登場」の見出しで予告が出され、また次のような「作者のことば」も掲げられた。

今度はじめて本誌に歴史小説を書いてみたいと思う。いま私の心のなかには、日本や中国の歴史の中に生きたさまざまな女性の姿がめまぐるしく去来している。その中の一人を私なりにとらえて、その女としての生き方を探ってゆきたいと思っている。(注13)

新年号で題目抜きの予告をした上、女性の読者に親しまれている作者の言葉まで添えて、「楊貴妃伝」がまだ発表していないうちに、すでにジャーナリズムの戦略に対応して、大衆の中で十分期待できそうな小説になったと言えよう。

ところで、ずっと井上靖の軽い随筆や現代小説を掲載していた『婦人公論』はなぜ今度はやや硬質な長編歴史小説を連載することに決めたのか。前文に触れた井上靖の中国旅行はもちろん一つの原因として考えられるが、そのほかに、六〇年代の大衆社会における女性読者の志向変化も雑誌の路線を変えた原因の一つではないかと思われる。尾崎秀樹は昭和三〇年代の女性読者について次のように述べている。

家庭における電化や台所革命が実現し、主婦の余暇時間がふえたこともあって、家庭の主婦層までが推理小説や時代小説を読むようになるのも、昭和三十代へ入ってからの現象だ。松本清張は推理もので一時代をつくったほかに「無宿人別帳」（昭和三十二年～三十三年）、「かげろう絵図」（昭和三十三年～三十四年）などで時代ものに独自な切込みをみせ、さらに現代史や古代史の謎にも挑んだ。ミステリーの第一次戦後派が時代ものに傾斜するのもこの時期のことだ。(注14)

尾崎秀樹の言っている時代物は必ずしも井上靖の歴史小説とは一致するとは限らないが、謎めいた歴史小説をもち、ミステリーブームに適応していく井上靖の「楊貴妃伝」はまさに主婦たちの余暇時間を潰すのにふさわしいものであると言えないだろうか。

「楊貴妃伝」はこういった時代性と整合する面を持っていたので『婦人公論』での連載を実現したのであり、その一方、井上靖と『婦人公論』との関係及び宣伝戦略も「楊貴妃伝」の連載に影響しているように見受けられる。

「楊貴妃伝」連載中の一九六四年三月、井上靖は「『婦人公論』のすす

め」という小文を書いた。

この雑誌の編集について、いつも感心するのは、どんな評論でも、写真でも、記事でも、かならず女性の立場から物が考えられており、日本の女性にとって、物を考える場になっていることでしょう。

娯楽にしろ、教養にしろ、編集者が作って無条件に読者に与える雑誌の多い中で、押しつけがましい態度はとらず、いつも読者に考える材料を与え、読者といっしょにそれを考えようとする編集の雑誌、批判精神をもった婦人雑誌は、現在の日本では非常に少いのではないかと思います。読者はこの雑誌によって、自分も考え、自分も発言する、ということの喜びを知ることができるでしょう。また、本誌について感心している点は、本当の教養というものを読者に知らせようとしているということです。このことは、非常に大切なことだと思います。(注15)

絶賛と言えるほどの紹介である。井上靖はほかに『主婦の友』『婦人画報』『婦人倶楽部』など多くの女性誌にも作品を発表しており、むしろ『婦人公論』での発表は少ないほうであるように見受けられるが、こんな絶賛の言葉を捧げるのは『婦人公論』だけである。連載中の宣伝の意味合いではないかと思われ、額面通りに受け取りにくい言説であろう。

もっとも、翌年の一九六五年は『婦人公論』発刊五〇周年にあたり、同誌の業績を讃えるのは常連作家の一人として為すべきことだと考えてもよい。実際に、一九六五年一〇月に、井上靖は「『婦人公論』の歩みを讃える」という小文を書いて、「五十歳の『婦人公論』に讃辞と敬意を惜しまない」と述べた。ずっと大衆のために創作を続けている井上靖は『婦人公論』などの女性誌と緊密な関係を保ちながら、それら女性向けの雑誌を応援し、また「楊貴妃伝」を以って、日本の女性の生き方を応援して堅実な大衆路線を踏んでいると言えよう。

四　むすび

六〇年代の大衆社会において、マスコミの発達とともに成長してきた大衆文学が新たな時代を迎える中、中国旅行と前後して中国関係の歴史小説を書き続けていた井上靖の作品は、大衆文芸雑誌の争う的になった。一方、時代の寵児とされる井上靖はその時代のニーズに応え、謎を解くことによって、歴史上の事件を矮小化し、文学的真実を探ろうとした結果、日常的な小事件を取扱って日常の底を探るミステリー小説との一致性を形成させていった。

文学のマスコミ化が進んで、マスコミ的性格を基軸とする六〇年代の大衆文学時代は大衆の人気作家井上靖を選んだ一方、井上靖自身も、積極的に大衆文芸雑誌と緊密な関係を保ちながら、自分の作品をもって大衆の生き方を応援している。こういった意味では、井上靖はこの時代を選んだとも言えよう。

参考文献

(一) 松原新一、磯田光一、秋山駿『増補改訂　戦後日本文学史』「年表」(講談社　一九七九年八月)
(二) 尾崎秀樹、岡保生、和田芳恵、中島河太郎『大衆文学大系別巻』「通史・史料」(講談社　一九八〇年四月)
(三) 『岩波講座 日本文学史　第十三巻　二〇世紀の文学　二』(岩波書店

一九九六年六月）
（四）野口富士男・編『座談会昭和文壇史』（講談社　一九七六年三月）
（五）井上靖『井上靖全集　別巻』（新潮社　二〇〇〇年四月）
（六）井上靖『井上靖全集　第十五巻』（新潮社　一九九六年七月）
（七）井上靖『井上靖全集　第七巻』（新潮社　一九九五年一一月）
（八）井上靖『井上靖全集　第六巻』（新潮社　一九九五年一〇月）
（九）井上靖、岩村忍『西域（グリーンベルト・シリーズ一五）』（筑摩書房
一九六三年四月）
（一〇）井上靖『楊貴妃伝』（講談社文庫　一九八九年五月）

注

注１　参考文献（一）三六七―三六九頁「『大衆社会』状況へ」による。
注２　同注１
注３　参考文献（一）三七七―三八一頁「小説の読物化と大衆文学」を参照。
注４　参考文献（五）七〇頁『井上靖小説全集』（第二十八巻）自作解題による。
注５　「今月の長篇小説」は雑誌のコラム名である。実際、「明妃曲」は一〇〇枚しかない短篇小説である。『オール読物』の目次では、「明妃曲」のタイトルの下に「一〇〇枚」と書かれており、誤解を避けるためであろうと考えられる。
注６　参考文献（一）三五三―三五四頁による。
注７　参考文献（八）四六一頁。
注８　参考文献（九）四〇―四一頁。
注９　参考文献（六）四六三頁。
注１０　参考文献（九）四〇頁。
注１１　参考文献（六）四五五頁。
注１２　参考文献（五）一三四―一三五頁。
注１３　参考文献（六）七二七頁「楊貴妃伝」解題。
注１４　参考文献（二）一〇六頁「戦後の展望」を参照。
注１５　参考文献（五）三五五―三五六頁。

（かしゆう・大連外国語学院講師　本学日本研究センター臨時研究員）